

昭和64年2月1日第3種郵便物認可  
平成17年1月1日発行（毎月1回1日発行）  
俳句雑誌「沖」第36巻第1号

俳句雑誌「おき」

1月号

沖

沖  
発行所

# 落葉みち

林 翔

## 風生先生の賀状

私が初めて富安風生先生の訶咳に接したのは、恐らく秋櫻子先生の梨咲くと葛師の野はとのぐもり

残り柿大空間をそれぞれ持つ  
カサてふ落葉コソてふ落葉色たがへ  
路ふたつ落葉の径を選ばむか

鳥声も冬の音楽丘の径

昭和六年に秋櫻子が論文「自然の真と文芸上の真」を発表して「ホトトギス」を離脱し「馬酔木」を独立させたのは俳句史上の大きな転機であったが、「ホトトギス」同人風生と「馬酔木」主宰秋櫻子との友情は変ることはなかった。共に東大俳句会以来の親友だったからである。私が風生先生に年賀状を出したの

木枯に夕月いよよ鋭鎌なす

極月の身を固く出づ風の中

離りゆく人へ振る手の手套脱ぐ

南天が光るよ福の神の瞳か

絵の乙女はだかのままに冬迎ふ

皇后の御手を真綿と被災者は

中越大地震



林 翔

は、恐らく真間山句碑除幕の翌年か  
らだろうと思うが、記録は残ってい  
ない。とにかく風生先生の年賀状を  
最初に頂いたのは一月三日だったと  
思う。しかしその翌年からは必ず一  
月元旦に風生先生からの賀状が届く  
ようになった。俳人としての格は大  
きく違うのに、親友秋櫻子の愛弟子  
というだけで、元旦に届くように年  
賀状を書いておられたのである。

ところが、昭和五十四年の元旦に  
は風生先生からの賀状は無かった。  
もう九十歳を越えておられる。お歳  
で大儀になられたのかなどと思つて  
いたら、やがて二月二十二日に逝去  
との訃報が届いたのであった。

# 滝仕舞

能村 研三

## 音楽夢くらべ

NHKのラジオで「音楽夢くらべ」という番組があった。これはある音楽を聴いて、個人個人のイメージを随想風に感想を述べるものであるが、「沖」の創刊同人であった故久保田博さんも、この番組に出演したことがあった。

今のように映画やテレビの映像中心の考え方はなかったので、五感のうちの目で聴いた音だけで、自分のオリジナルな世界をイメージすることができた。

私が、市川学園に入学したときの担任は、新任の若い音楽の先生だったので生徒からも人気があり、中でも音楽鑑賞室でクラシック音楽のレコードを聴かせてもらう時間が楽しかった。そしてただ聴くだけでなく音楽を聴いた時の感想をノートに書き記すようにいわれ、しばらくそれを続けた。演奏の良い悪いなどよりも、さきほどの「音楽夢くらべ」のような感覚で曲のイメージを自由に書いた。

そんなことをしているうちに、クラシック音楽が好きになり東京で開催される交響楽団の演奏会にも足を

覚めてすぐ立ちたる冬に向かふべし

裏干しの軍手の乾く冬はじめ

海の枯れ見ゆるまで佇つ岬かな

晩禱に節くれの手と冬帽子

幸田弘子の朗読を聞く

一葉忌文語語りは小気味よし

紊乱の贅をつくせし枯蓮田

冬の虹鼻梁の高き神父来て

冬怒濤捨て身のこころ貰ひけり

この奥の滝を仕舞ひて枯れ深む

聞き耳の耳に及びし冬日かな

運ぶようになった。まだ学生だったので、チケットを買い、お金もなく、テレビの公開放送を往復はがきで申し込みながら生の演奏を聴いた。一時は、ベートーベン、モーツァルト、ブラームスなどの交響曲は序奏だけで、曲名を当てることもできた。

市川市文化会館の仕事で、在京の交響楽団のN響、都響、東フィルなどの事務所をまわり室内楽アンサンブルの演奏会の企画交渉をしている自分の立場が不思議でもある。

クラシック音楽の専門的な知識など全くないが、中学時代からのささやかな経験が何とか今の自分を支えてくれているようにも思える。

能村研三



『余韻』

(自選二十句)

藤原 照子

人脈に淡くつながりさくら狩  
鬼太鼓へ海より迫る夜の霧  
砂風呂に目つむりて鶴渡しけり  
神輿舁乳房なきまで晒巻く  
なまはげの去りぎは咳をこぼしけり  
舟唄や水面のほかは雪づくし  
ふたりゐてひとりの夜長たのしめり  
膝掛をして根の生えてしまひけり  
かの日より余生とおもふ冬ざくら



ふたたびはかなはぬ登山靴二足  
眼つむりて聞く島唄や冷し酒  
暑氣払死なぬつもり顔そろふ  
お花畑来世落合ひたきところ  
夕月を容れて雪吊仕上れり  
逃げ腰にかまへて氷柱打ちおとす  
ひとすぢの道たまはりし朴花忌  
声かけて良夜の仏間開け放つ  
人拒むとも誘ふとも霧樹海  
山霧へ己が深息加へけり  
墓洗ふ恋の余韻のなくはなし

『真 咲』

(自選二十句)

辻 美奈子

桜満開おのが身に皮膚いちまい  
春灯やをとこが困るときの眉  
水抱けば水の逃げゆく立泳  
旧姓といふ空蟬に似たるもの  
蓮掘のひと傾ぎつつ立ち上がる  
泣くときにつかふ腹筋豊の秋  
冬瓜や海ゆく旅を恋ひゐたる  
天空に月ひとつわが受精卵  
身ふたつのなんの淋しさ冬麗



数へ日の門ゆるき父母の家  
馥郁と闇あり産みし年惜しむ  
明日ひらく桜の夜は匂ひけり  
ゆつくりと縄締めまりゆく花の雨  
大樹いま水さかのぼる立夏かな  
光年は涼しき距離ぞ生まれ来よ  
竹皮を脱ぐやこどもはいつも旬  
翼なけれど裸子を抱く双手  
恋のころ来し花野にて子を抱けり  
咲いてからつづく青空花八つ手  
手の中に小さき手のある雪催

『要 滝』

(自選二十句)

望月 晴美

脱ぎし衣にかすかな湿りさくらの夜  
花の風寝釈迦をすぎてわれを過ぐ  
駈けくる子抱き上ぐ春の風ぐるみ  
亡き母の名入り鞆と春の旅  
師おもへば朴はますます仰ぐ花  
子の一日知りたる水着干されけり  
月下美人の白こそ燃ゆる色ならん  
一山の静脈のごと滝落つる  
どうせ見るなら炎天のコロシウム



ひゆうると呱呱の声あげ大花火  
向日葵や夫になかりし老残期  
羅を着てなんとなく羽化ごころ  
曼珠沙華百万本の地は熱し  
ためらひつ借る十六夜の男傘  
曼珠沙華どこかさびしき一途の朱  
マッターホルンの全容うつし山湖澄む  
しばらくは灯さずにゐる良夜かな  
遠目にも凍つ一山の要滝  
忘我てふとき秋天の紺匂ふ  
フォルテもて「第九」を歌ふ嚴寒期

# 沖作品



## 能村研三選

秋風や朝市はねし川通り

夜長さの白湯吹き窪め吹きくぼめ

五週目の空白ふうせんかづらの実

谷住みの日和のがさず胡麻叩く

休み田に小旋風立てり神の留守

夕星の仮眠にほたるぶくろ貸そ

句碑撫づる百の掌の供花秋惜しむ

奥の院銀の柄杓に水澄めり

廻廊の杉板軋み賜日和

雁渡しし千手観音羽搏かむ

美しく通草の割れて自祝の日

晩秋に繋がれてゐる神の巖

穂芒や風の筋目の見えて来し

つくばひの水の浮力や初もみぢ

笹鳴や箒目は火に集まりぬ

東京

坂ようこ

工藤 進

中尾公彦

縁側に足踏みミシン小鳥来る

アイロンの滑りのよき日小鳥来る

秋の夜やジャムセツションに足鳴らし

男盛りの裸形すさまじ仁王像

秋風にふれて火玉の玻璃となる

バンダナの若きと並び墓洗ふ

木曾谷へ傾ぐ単線鳥渡る

紅葉街道「馬の塩なめ石」に座し

野外音楽堂落葉の中の音合せ

磴駆けて双手は翼七五三

鼻祖の地の山野を映し芋の露

眼に力まだ残りをり捨案山子

前頭葉ふはりとかるき野分後

冷まじやシテ俊寛の息づかひ

木偶の頸がくと釣瓶落しかな

市川市

栗原公子

千葉

大沢美智子

鈴掛 穂

冬紅葉静脈透けし女と居る

神奈川

菅原健一

訳もなく他人信じたき冬はじめ  
半月と言へど冬月侮れず

強かにうなだれもする冬芒  
海風ぎて冬の朝日の尾をとどむ

新潟

長谷川春

切株は棟梁の椅子山紅葉  
茸売り瓜実顔でありしかな

初恋のひと生きてをり山粧ふ  
笛太鼓月より笥ひびきけり

千葉

佐久間由子

きりん草いま月光を吸うてゐる  
岬晴れを讃へ始まる松手入

鳥渡る潮目さだかに日の射して  
ものもの墓をおほひて蔦紅葉

神奈川

石田 静

軒高く風のからびぬ唐辛子  
団栗を拾ふ想ひ出拾ふごと

コスモスの千の笑顔に紛れけり  
帯留はなななかまど色マチス展

新潟

三留 早苗

震へたる村に祈りの小春かな  
野紺菊濃く迎へらるいさむ墓所

震度六どうあらうとも月明り  
余震なほ櫓は伸びること必死

市川市

岡本 崇

秋耕の腰立たざるを遠見せり  
間合とるトランポリンや颯雲

スタートライン走者色なき風の中

窯開き知りたるごとく鴝高音  
上るほど淡きや島棚田  
日本に富士の名いくつ鳥渡る  
水鳥や月遊ばする水鏡  
日陰りの早き遠山つるし柿  
露を置くトラック発てり丑の刻  
月光のしづく芋虫太らせて  
秋惜しむ筆策の音に耳あづけ  
近づけば門灯ともる一葉忌  
今朝冬のマイクの拾ふ風の音

長野

松澤 秀昭

代田 幸子

### 新人賞予選句（二月）

五週目の空白ふうせんかづらの実  
句碑撫づる百の掌の供花秋惜しむ  
笹鳴や箒目は火に集まりぬ  
縁側に足踏みミシン小鳥来る  
磴駆けて双手は翼七五三  
前頭葉ふはりとかるき野分後  
訳もなく他人信じたき冬はじめ  
笛太鼓月より笥ひびきけり  
岬晴れを讃へ始まる松手入  
震へたる村に祈りの小春かな

坂 ようこ  
工藤 進  
中尾 公彦  
栗原 公子  
大沢美智子  
鈴掛 穂  
菅原 健一  
長谷川春  
佐久間由子  
石田 静

# 沖作品 選後句評

\*  
能村研三

五週目の空白ふうせんかづらの実 坂ようこ

ひと月のカレンダーで五週目に土曜か日曜がある月は何か儲けたような気になる。最近の俳人も、土曜日、日曜日共に各地で定期的な句会があり、スケジュールで一杯だが、五週目はまづは定期的な会合はなく家でゆつくりすることが出来る。忙しい現代人の宿命でもあるのか、こんな日にしか本当の安息日があるかもしれないことには少し悲しくなる。しかし、勤勉でややせせこましい日本人は、そこにまで臨時の会合をもち、俳人だと今日には有志で吟行会にでもでかけようということになる。いずれにせよぼかつとあいた空白の時間は忙しい人間にとつては何よりありがたいと痛切に実感する。この句は二句一章のかたちをとつていて、季語の「ふうせんかづらの実」の斡旋もおもしろい。「ふうせんかづら」は夏に粟粒のような小さな花をつけ、その後にかわいらしい薄緑色の風船のような実をつける。柔らかな風船が茶色になると中からハート模様の種が出てくる。そんな

ことから、幸せを象徴する植物の一つである。

句碑撫づる百の掌の供花秋惜しむ 工藤 進

十月の下旬に行われた、九州大会での句。大分県国東の両子寺の句碑は開眼から四年の月日がたった。建立の時は先師登四郎が亡くなる一年前で、やや体も衰弱していたものの、九州ではめずらしい雪の日の開眼式に出席できたことは深く印象に残っている。四年前の開眼式には東京からは北川英子さんと長谷川鉄夫さんら数名に出席いただいたが、今回の大会には八十名を超える参加がありにぎやかであった。句碑は両子寺の中にも目立つところに建っており、バスを降りた会員の皆さんは、一斉に師の句碑の元に駆けつけた。句碑に抱きつかんばかりの人や、句碑に頬づりをする人など、亡き師に一瞬会えたような瞬間でもあった。皆それぞれが句碑に触れたのが印象的であったが、先師登四郎を知らない工藤さんなど新しい人たちにも句碑に触れることで、師と語らうことができたのだ。句碑に掌を触れることがすなわち先師を偲ぶことでそれが供花でもあった。

笹鳴や箒目は火に集まりぬ 中尾公彦

冬の鶯は人里を降りてきてチャツ、チャツという地鳴きしか出来ないが、冬枯れの庭にはその鳴き声も何となく愛おしさを感じさせる。降っても降っても降りやまない落ち葉を庭隅で焚いている所へ箒で掻き集める。地面についた幾条もの箒目の流れは美しい。静寂なときの流れの中、聴覚で捉えた笹鳴の鳴き声を背景にして、日本人独特の美意識の極地をも見出したように思える。句の表現も省略が効いていて無駄なところがない。